理解不能な動機の社会的構成

――豊川主婦殺害事件（2000 年）を事例として――

和光大学ほか非常勤　赤羽由起夫

1　目的

本報告の目的は，殺人を目的とした殺人を対象として，理解不能な動機が構成される過程とその方法を明らかにすることである．

2000 年 5 月 1 日，愛知県豊川市で主婦が殺害され，その翌日，交番に出頭してきた高校 3 年生の 17 歳少年が逮捕された（以後，豊川主婦殺害事件と呼ぶ）．この事件の犯行動機は，「人を殺す経験をしてみたかった」という理解不能なものであり，精神鑑定を経て少年に「アスペルガー症候群」との診断名が付与されたものの，理解不能とされたままに終わった．本報告では，豊川主婦殺害事件を事例として，「人を殺す経験をしてみたかった」という動機と「アスペルガー症候群」という精神疾患とのつながりに焦点を当てて，理解不能な動機が構成される過程と方法とを明らかにする．

2　方法

そこで，データとして新聞報道を用いて，動機の語彙論（Mills 1940=1971）と成員カテゴリー化分析（Sacks 1972=1995）の視点から分析する．これらの視点によると，行為者に付与される成員カテゴリーと行為の動機とのあいだには相互反映的な関係があり，成員カテゴリーとしての精神疾患と犯行動機との結びつきについても分析が可能となる（大貫・松木 2003）．

3　結果

分析の結果，明らかになったのは，つぎの 3 点である．第 1 に，「アスペルガー症候群」と犯罪との結びつきがあらかじめ否定されたため，「アスペルガー症候群」は犯行動機の説明に用いられないカテゴリーだったことである．第 2 に，その一方で，「アスペルガー症候群」は，犯行動機とは結びつかない少年の性格や行為の傾向についての説明には用いられていたことである．第 3 に，以上の結果として，「人を殺す経験をしてみたかった」という犯行動機が，「アスペルガー症候群」やそれによって説明される少年の性格や行為の傾向と因果的に結びつかないまま宙に浮き，犯行動機が理解不能なままに終わったことである．

4　結論

以上から，「人を殺す経験をしてみたかった」という犯行動機と「アスペルガー症候群」という成員カテゴリーとの結びつきを積極的に切り離すという実践によって，動機の理解不能性が維持されていたことが明らかになった．

文献

Mills, Charles W., 1940, “Situated Actions and Vocabularies of Motive,” *American Sociological Review*, 5: 904-913.（=1971，田中義久訳，「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房，344-55.）

大貫挙学・松木洋人，2003，「犯行動機の構成と成員カテゴリー化実践――いわゆる『足利事件』における精神鑑定をめぐって」『犯罪社会学研究』28: 68-81.

Sacks, Harvey, 1972, “An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology”, David Sudnow ed., S*tudies in Social Interaction*, Free Press, 31-74.（=1995，北澤裕・西阪仰訳，「会話データの利用法――会話分析事始め」『日常性の解剖学』マルジュ社, 93-173.）